

施行し、良好な結果が得られた症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

## 2 閉塞性腸炎を伴う進行大腸癌に対して二期的に腹腔鏡手術を施行した1例

佐藤 洋・富田 広・矢島 和人\*  
 県立坂町病院外科  
 新潟大学第一外科\*

症例は82歳、女性。嘔吐・腹痛を主訴に入院。腸閉塞および閉塞性腸炎を併発した進行S状結腸癌と診断され、準緊急で腹腔鏡下手術を施行した。閉塞性腸炎を併発していること、高齢であることなどから一期的な吻合を避け、Hartmann手術を選択した。進行度はStage IIであった。術後順調に回復し、再発もみられないため、6ヵ月後に腹腔鏡下での人工肛門閉鎖術を施行した。腹腔内には癒着は認めず、安全且つ短時間に再吻合を行うことができた。術後合併症なく退院し、外来通院中である。腹腔鏡手術は手術時の創の小ささや低侵襲にばかり目がいくが、再手術の時にこそその威力を発揮する。本症例のように鏡視下で二期分割に手術を行う報告も今後増えてゆくものと考えられる。

## 3 当科における腹腔鏡下虫垂切除術の治療成績

前田 知世・亀山 仁史・澤岷 安勝  
 横山 直行・山崎 俊幸・桑原 史郎  
 大谷 哲也・片柳 憲雄

新潟市民病院外科

当科では、膿瘍形成を認めない急性虫垂炎に対しては、腹腔鏡下虫垂切除術(LA)を第一選択としている。当科のLAの成績から、今後の課題につき検討した。

急性虫垂炎の診断で腹腔鏡手術を行った109例(男58例・女51例・中央値35歳)と術前明らかな膿瘍を認めない開腹手術(OA)72例(男32例・女40例・中央値39歳)を比較した。手術時間中央値は、LA群61分、OA群43分( $p < 0.05$ )であった。LA群に手術時間とBMIとの相関はな

かったが、B群で相関を認めた。術後入院日数はLA群5日、OA群8日( $p < 0.05$ )であった。穿孔例のLA群では、創感染は低頻度であったが、術後膿瘍は高頻度であった。

LAは、在院期間の短縮が得られ、肥満者には良い適応と考えられた。穿孔例の術後膿瘍対策が、今後の課題である。

## 4 直腸肛門部悪性黒色腫の4例

太田 一寿

太田西ノ内病院外科

直腸肛門部悪性黒色腫は、同部悪性腫瘍の0.1~0.5%と稀な疾患で、早期に血行性、リンパ行性に転移し、きわめて予後不良である。今回4例経験したので、文献的考察を加えて発表する。

4例共女性、45~70歳、主訴は3例で下血、1例は肛門部違和感。いずれも肛門部直上に腫瘤あり、3例は隆起型で術前診断がつき、Mils'opを行った。1例は粘膜下腫瘍様で、術前診断がつかずLARを行った。ss2例、sm1例、m1例。3例はリンパ節転移なく、2例は脈管侵襲なし、1例は不明。1例はリンパ節転移、脈管侵襲陽性で、術後1年3ヶ月多発転移にて死亡。sm浸潤例は、約7年で再発転移し、7年6ヶ月目に死亡。粘膜下腫瘍様、ss浸潤例は、約5年後再発し切除、6年5ヶ月生存中。もう1例は、1年4ヶ月再発転移なく生存中。

長期生存には、早期に発見し、早期に手術を行うべきである。

## 5 婦人科腫瘍に対して骨盤内臓全摘術を施行した6症例

岡本 春彦・高橋 元子・永橋 昌幸  
 小野 一之・田宮 洋一・児玉 省二\*  
 県立吉田病院外科

県立がんセンター新潟病院婦人科\*

2004年2月から婦人科腫瘍に対して骨盤内臓全摘術を施行してきたが、その結果について報告する。

【目的】婦人科悪性腫瘍に対する骨盤内臓全摘術の意義を検討する。

【対象】子宮体癌1例, 子宮頸癌2例, 卵巣癌2例, 中皮腫1例. 中皮腫の1例を除く5例は, 骨盤内臓全摘術を施行する以前に化学療法あるいは放射線化学療法が施行されていた. 肉眼的R0手術が5例, R1手術が1例であった.

【結果】4症例で創・骨盤腔感染を来したが保存的に治療可能であり, 再手術例や術死例は認めなかった. 術後約2年無再発で生存している症例も認めた.

【結語】術後経過観察期間が短く予後についての検討は十分に出来ないが, 究極の debulking surgery としての意義は大きいと考えられた.

## 6 当院における FOLFOX, FOLFIRI 療法の現状

下田 傑・西村 淳・新国 恵也  
河内 保之・牧野 成人・寺島 哲郎  
北見 智恵・横澤 将宏・広瀬 由和  
厚生連長岡中央総合病院消化器病  
センター外科

今回私達は当院における FOLFOX, FOLFIRI 療法の現状, 成績などについて検討した. 対象は2006年10月～2008年11月までに治療をした60例. 2008年の新規導入者数は30名. 原則として進行・再発癌に対して FOLFOX, FOLFIRI 療法は行われているが, 2例だけ術後補助化学療法として行われていた. 進行・再発切除例は11例で, 10例は現在まで再発を認めていない. 進行・再発非切除例ではレジメン別, 投与量別などの奏効率について検討した.

稀な副作用として間質性肺炎を2例認め, うち1例は救命できなかった. 今後も長期にわたる FOLFOX, FOLFIRI 療法症例の蓄積が必要であると考えられた.

## 7 胆管癌を合併した3歳男児の先天性胆道拡張症の1例

七種 伸行・内藤 真一・新田 幸壽  
飯沼 泰史\*・橋立 英樹\*\*  
新潟市民病院小児外科  
同 救命救急センター\*  
同 病理部\*\*

我々は胆管癌を合併した3歳男児の先天性胆道拡張症の1例を経験したので, 若干の文献的考察を加えて報告する.

症例は3歳, 男児. 激しい上腹部痛・嘔吐で発症した. 腹部超音波検査および腹部CTで嚢腫状に拡張した総胆管を指摘されたが, 胆道壁の不整や隆起性病変など悪性腫瘍の合併を疑う所見は認めなかった.

先天性胆道拡張症と診断し, 胆嚢及び肝外胆管の切除と肝管空腸吻合を行った. 切除標本の肉眼所見では粘膜面の異常所見は認められなかったが, 病理所見では胆嚢管に浸潤し広範囲な上皮内進展を伴う高分化腺癌を認めた.

先天性胆道拡張症の初回手術時に胆管癌合併を認めた症例は小児でも少数ながら報告されているが, 本症例は世界最年少と思われた.

## 8 Fibrous sheath を用いた中心静脈カテーテル入れ替えの工夫～長期血管温存のために～

平山 裕・窪田 正幸・奥山 直樹  
塚田 真実  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
小児外科学分野

短腸症候群や難治性イレウスの患児において, 血管ルートの長期温存が課題となる. 我々は中心静脈カテーテル(以下CV)入れ替えの工夫として, 症例により皮下トンネルの線維性鞘(fibrous sheath)を再利用する方法を行っている. H20年6月からの約5ヶ月間に2例, 計3回(平均7歳7ヶ月)の交換を行い, いずれも合併症なくスムーズに施行し得た. 手順はまず, CV皮膚刺入部から剥離を進めカフを剥離後, CVを包む線維性鞘を同定する. 次いで感染所見が無いことを確認